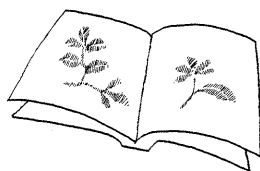


『心理学ってどんなもの』 『ソラリスの陽のもとに』

山本 政人



何を今さらと思われるかもしれない。曲りなりにも心理学をやっている、それを教えることを生業としていながら、今もって「心理学とは何か」悩んでいる。

タイトルが「心理学とは何か」ではなく、『心理学ってどんなもの』（海保博之著、岩波ジュニア新書）であることに重要な意味がある。単に中高生向

けにそういうタイトルにしたのではないと思う。私ごときが言うのは僭越の極みだが、「心理学とは何か」を語ることはおそらく誰にもできない。辛うじて「どんなものか」を語ることはできるかもしれない。それをうまく語られた本だと思う。流石と云うべきである。

それから岩波ジュニア新書全般に言えることだ

が、非常にレベルが高い。中高生向けと言うが、大学生でも社会人でも、十分読み応えがある。本家の新書よりもレベルは高いのでないかと思う。深く考えてみると、中高生が一番勉強する時だから、レベルの高いものはむしろふさわしいかもしれない。あるいは本家の新書の方が高齢者向けになっていて、大学生も三十代、四十代もまだジュニアだから、ジュニア新書という呼称は正しいのかもしれない。とにかく大学生も三十代、四十代も読むにふさわしいシリーズである。

内容はと言うと、一見硬そうで、やはりちよつと硬い。でも読みやすい。心理学の知識を簡潔にまとめてある。そして単なる知識の羅列ではなく、心理学の見方、考え方がしっかりと書かれていて、ちゃんと勉強してこなかった私にはとても勉強になった。それにしてもいろいろな心理学があつて、「心理学とは何か」という問い自体が意味を持たないと改め

て思った。つまり「あんなものもあるし、こんなものもある」のが心理学なのである。そもそも「心とは何か」という根本的な問いに対する答えがまちまちなことから無理もない。

この「心とは何か」という問題については、本書では精神分析やゲシュタルト心理学において細々と研究が行われてきたとされている。ところが二〇世紀後半になって、この問題は一気に心理学のメインテーマとなる。認知心理学の台頭によるのだが、認知心理学の関心は、人間の認知から人工知能やコンピュータにも心を持たせることができるかということに移っていく。人間がコンピュータに心を感じたとしても、それは人間の心と同じなのか。永遠に答えは出ないのではなからうか。

このテーマは昔からよくSFで扱われてきた。有名なところでは、『二〇〇一年宇宙の旅』のスーパーコンピュータ「HAL9000」がある。『HAL

9000」は自我に目覚め、人間に対して反乱を起こす。また、「鉄腕アトム」はロボットだが心を持っている。人間よりもよほど人間らしい心である。

心理学から強引にSFへつないだのは、『ソラリス』のことを書きたかったためである。すでに映画が公開されているはずだが、楽しみなのである。確か私が大学に入った頃、タルコフスキー監督の映画『惑星ソラリス』が話題になっていた。原作はスタニスワフ・レムの『ソラリスの陽のもとに』（スタニスワフ・レム著、ハヤカワ文庫）であるが、私には映画より原作の方が面白かった。

惑星ソラリスは表面をゼリー状の海に被われている。その海はどうやら生きているらしく、しかもかなり高度な知性を持っているらしい。人間はこの不可解な海に放射線を当ててみる。すると海は…。

この小説のテーマは、未知の対象と出会った時、人間が何を考え、どのように振舞うかということ

ある。お決まりのパターンだが、人間はいつも未知の対象に対して乱暴なことをしてしまふ。そして相手からのリアクションがあり、しばらくの応酬の後に、次第に相互理解が生まれる。というのが小説の筋だが、私たちの現実の世界では、未知の対象でもないのに応酬は限りなく続き、理解はなかなか生まれない。

『ソラリス』の主人公は心理学者ということになっていて、他の科学者たちはソラリスの海をあくまで分析の対象、つまり物としか見ないのに、主人公は海が意志を持つと考え、理解しようとする。この姿勢は「アニミズム」とも言えるが、この姿勢こそ他者を理解するために重要なものではなからうか。さらに言えば、心理学者とは、対象を分析することよりも、対象の知性や意志を感じ取ることに長けた者である、と小説ではなっているのだが…。

(学習院大学)